No. 1236

学内広報

2002. 4. 10
東京大学広報委員会

平成十三年度卒業式、学位記授与式行われる

（平成十四年三月二十八日(木)・二十九日(金)）

▲卒業式風景

▲学位記授与式風景

目　次

特別記事 …… 2
平成13年度東京大学卒業式総長告辞(文系)、平成13年度東京大学卒業式総長告辞(理系)、平成13年度東京大学学位記授与式総長告辞（修士課程)、平成13年度東京大学学位記授与式総長告辞（博士課程）
一般ニュース …… 9
副学長の就任、部局長の交代、部局長退任挨拶、卒業式行われる、学位記授与式行われる、平成14年度入学者数決まる
部局ニュース …… 14
文学部・人文社会系研究科の事務改善提案表彰について、東京大学外国人留学生後援会主催による「留学生スキー講習会」開催される
掲示板 …… 15
スポーツ・トレーニング（実習）開講のお知らせ、共済組合からのお知らせ、布施学術基金公開講演会「東洋の文化」第10回、教養学部進学情報センター主催シンポジウムの開催、「教養学部報」第455(４月３日）号の発行
事務連絡（人事異動） …… 17
広報委員会 …… 18
広報委員会委員長就任の挨拶、退任の挨拶
訃　報（野口彌吉名誉教授） …… 19
淡青評論「二年目の雑感」 …… 20

≪ 特別記事 ≫

平成13年度東京大学卒業式総長告辞（文系）

本日ここに学士の称号を得て、卒業の時期を迎えられた皆さんに対し、心からお祝いを申し上げます。また、この日に至るまで長い間にわたって皆さんの勉学を支えてこられたご家族の方々のご労苦に対しても敬意を表する次第であります。

今日、学士の称号を得るということは「勉学の終わり」を意味するものではなくなりました。かつて学士が勉学の終わりを意味した文系においてすら、事態は急速に変化しています。理系の卒業生の多くは再び大学院において研究を続けると思いますが、文系の卒業生にしてもそのかなりの部分は将来さまざまな形で大学院での勉強の機会に接すると思います。その意味で学士の修了は「勉学の一区切り」でしかなく、更なる飛躍に向かう一つの跳躍台に過ぎません。

この観点から、この卒業を「勉学の終わり」とし、しかも、その成果をご破算にして、いわば白紙状態で新しい世界に飛び込む人生の転機と考える古い発想とははっきりと決別しなければなりません。確かに皆さんは何らかの意味で新しい世界に入ることになりますが、皆さんがこの数年にわたって本学において獲得した成果は今やあなた方自身と一体のものであり、これを粗末に扱うことは自らを粗末に扱うことであるということを肝に命じて、より充実した自らの人生を実現するための大切な礎にしていただきたい。日本のこれまでの知的生活の問題の一つは次々と学んだものを卒業していき、あらゆる状態に適応しつつも、結局自らは何者であるかについて思考する習慣を継続的に喪失してきた点にありました。こうした卒業現象は知的生活の底の浅さにつながっているわけですが、最近、財界人などの間でも哲学などの必要性を強調する意見が目立っているのは古い卒業現象型適応が一種の自家中毒現象を生みだし、自縄自縛を招いているからだと思います。ある意味で人間は自ら考える動物であり、端的に言えば自らと社会を解釈し続ける動物です。この習慣を維持することは本人にとっても、自らの属する組織にとっても、貴重なものであることを皆さんに是非とも銘記していただきたい。

ところで人生は歴史の刻印を免れることはできません。日本が高度成長を謳歌していた時代には時間は常にわれわれの味方であり、個人の能力その他を不問に付すような形でシステムが魔法のような効果を発揮しているように見えました。しかし、皆さんが物心ついて以降はシステムの機能不全が目立ち、時間は無気味なクレバスをあけてわれわれを待っているように見えてきました。相互信頼過剰と見られていた日本社会は今や相互不信増幅社会となり、他のバッシングによって自らの免罪符を手に入れようとする粗雑な議論が横行するようになりました。その典型的なものとして、日本経済の不振の最大の原因を大学の研究教育に求めるような議論があります。しかし、あたかも大学が莫大な不良債権の原因であるかのような議論は正気の議論とも思えません。また、大学から成功赫赫たるベンチャー企業が大量に発生し、そこに日本経済の回復シナリオの一つの核心があるといった発言が新聞紙上に溢れていますが、私はこうした議論が「奇跡」頼みのものではないかということを心から恐れております。他の先進諸国と比較して日本の高等教育への投資が対ＧＤＰ比で圧倒的に低いことはすでによく知られております。それは皆さんがこの数年間を過ごした施設の貧弱さに如実に現れております。こうした事実を無視し、その上極端な悲観論に基づいて勝手な大学バッシングを繰り広げることは自ら墓穴を掘るようなものです。

この過度の楽観論と過度の悲観論の振幅は日本社会に特有のものではありませんが、日本社会がこの一世紀の間に二つのシステムについてこの巨大な振幅を味わったことははっきりしています。言うまでもなく、大日本帝国システムと高度経済成長システムの二つをめぐる歴史ドラマがそれに相当します。これはわれわれのユニークな歴史的経験です。少なくとも、他のアジア近隣諸国にはこうした経験は皆無です。しかし、このユニークさを指摘して満足することがここでのテーマではありません。

問題の核心は二つあります。第一は、何故にこのような極端な振幅が起こったのか、特に、何故にこうしたシステムの失敗が起こったのかという問題です。勿論、外部勢力の「陰謀」に全ての原因を求めようとする人々に事欠くものではありません。そこでもっと限定的にいえば、仮にわれわれのシステムに問題があったとすればそれはどこにあったのかという問いかけです。夏目漱石の『三四郎』の冒頭部分において三四郎が日本は「亡びるね」という言葉を発する人物に出会って驚愕する場面がありますが、その場面に示唆されているように問題が知的、精神的なものであればわれわれそれぞれの問題であり、特に、大学において教育に従事している者は無視するわけにはいきません。これは技術的・専門的知識の問題とは次元を異にした思考態度に関わるものであり、人間の社会生活に関わる重要問題の洞察力と解決能力に基本的な問題があったということでしょう。

第二は、この二つのシステムをかつてと同じように繰り返すことはできないし、あるいは、すべきでないという点に関わります。今から百年前に立ち戻り、ナイーブに自らの可能性について構想するにはわれわれは余りにも重い歴史体験を重ねてしまいました。丁度今から百年前、本学の前身の一つである第一高等学校の寮歌として有名な「嗚呼玉杯に花うけて」が発表されましたが、あそこに漂う健康なナイーブさをわれわれは失ってしまいました。しかし、そのことを嘆いたり、過去を「なかったことにする」のは新たな混乱と新たな失敗の原因を自ら作ることにつながるだけです。むしろ、それらを精神的な糧として将来のシステムを構想することが課題だと考えられます。次のシステムの実像はこれから刻まれ、自らの資源と制約条件の下で創造されなければなりません。しかし、兵器やモノ、カネに頼り切るよりも知恵と

自発性を軸に新たな公共性を構想することを前提にするものであることは容易に想像されます。その意味でナショナリズムと経済成長という二十世紀的シナリオしか見られないこの地域において先駆的な意味を持つ試みと考えられます。皆さんの世代が見事にこの挑戦において成果をあげるよう大いに期待しております。

こうした歴史の変わり目は何時の場合にも若い世代に格好の活躍の舞台を与えてくれます。「運命の女神」は絶えず挑戦する若者の友人であるということが言われてきたのは決して偶然ではありません。そこから新しいリーダーが随所に出現するはずでありますが、それへの踏みならされた平坦な道はありません。道は見通しが利かず、常に果敢な挑戦によって切り開かれるべきものとなります。また、安定したように見える組織はその安定性の故に早晩危機に見舞われるのは今や周知の事実です。どのような豪雨や洪水にもびくともしない堤防があるという前提そのものが崩れてしまいました。これは一見異常な事態のように見えますが、長い歴史からすれば成功への平坦な道があるかのように考えていた時代こそむしろ例外であったという現実を認識すべきです。

盤石な堤防がある時代は羨ましく見えるかも知れませんが、実は自由が窒息し、画一化とマニュアル化が進み、精神的には不毛な時代でありました。現在の日本の抱えている最大の問題はこのような精神的不毛が社会の仕組みに深く浸透し、身動きできない状態をもたらした点にあります。逆にいえば、皆さんはこうした自由の窒息状態を免れ、安定を少々犠牲にしてもそれを補って余りある自由な思考と自由な挑戦を享受できると思います。皆さんがアニマル・スピリッツとでもいうべきものを発揮して果敢に大きな荒波に正面から挑戦するか、それとも、粘り強く活動を続けることによって手作りの堤防と実りある自由を享受できる道を選択するのか、それは各人の選択にかかっています。しかし、「寄らば大樹の陰」とばかりにありもしない大樹を求めて空しく人生を送ることだけは考え直すべきであろうと思います。

皆さんはこの数年大学で学び、幾許かの専門的知識を身に付けたことでしょう。同時に注意すべきは専門的知識の持ち主だけで社会システムは存続できないし、健全なバランスを維持できるものではないという点です。社会が一定程度良好な状態を維持するためには人間の共存関係の質を処理していく的確な知恵と道義性を備えた人間を必ず必要とし、そのような指導者を必要とします。若し、皆さんが社会において指導的な立場を求めようとするならば、自らのそうした知的・精神的力量についての厳しいテストを覚悟し、しかも、報われないことを覚悟した上での挑戦であることを予め認識すべきでしょう。不用意にそうした立場を求めることは本人にとっても社会にとっても誠に有害無益です。この点で人間世界は今も昔も苛烈であることを忘れてはなりません。そして、どのような人間がそうした立場にふさわしいかについて常に冷静な判断力を持ち、また、自らについて自省の態度を持つことを忘れないようにしていただきたい。

東京大学は皆さんの前途への大きな期待を込めて、本日オックスフォード大学のコーリン・ルーカス総長に遙々とご列席をいただき、特別のスピーチをお願いしております。明治の開学以来、本学の実に多くの先輩たちがオックスフォード大学に憧れ、そこでの勉学や研究の機会を与えられてきたことは改めて申すまでもありません。また、東京大学はオックスフォード大学の数少ない協定大学の一つとして交流をさせていただいてきております。今日ここにルーカス総長をお迎えできたことは東京大学にとって記念すべき出来事であり、非常に名誉なことであると存じております。ここにルーカス総長の東京大学に対する深いご配慮に対して心から御礼を申し上げる次第であります。ルーカス総長はフランス革命研究などの業績で広く知られ、数々の輝かしい御経歴の後、ベイリオル・カレッジの学寮長を経て一九九七年から総長職を勤めておられます。大学のあり方を含め、その御見識は多くの尊敬を集めており、私にとりましても最も尊敬に値する先達のお一人でございます。卒業生の皆さん、どうぞこの記念すべき瞬間を生涯の記憶に留めるよう、ルーカス総長のお話を聞いていただきたい。

それでは最後に、卒業生の皆さんが心身ともに健康を維持し、その人生が希望に満ち、何よりも悔いのないものとなることを心から祈念して告辞を終わることと致します。

平成十四年（二〇〇二年）三月二八日

東京大学総長
佐々木　毅

平成13年度東京大学卒業式総長告辞（理系）

本日ここに学士の称号を得て、卒業の時期を迎えられた皆さんに対し、心からお祝いを申し上げます。また、この日に至るまで長い間にわたって皆さんの勉学を支えてこられたご家族の方々のご労苦に対しても敬意を表する次第であります。

今日、学士の称号を得るということは「勉学の終わり」を意味するものではなくなりました。かつて学士が勉学の終わりを意味した文系においてすら、事態は急速に変化しています。理系の卒業生の多くは再び大学院において研究を続けると思いますが、文系の卒業生にしてもそのかなりの部分は将来さまざまな形で大学院での勉強の機会に接すると思います。その意味で学士の修了は「勉学の一区切り」でしかなく、更なる飛躍に向かう一つの跳躍台に過ぎません。

この観点から、この卒業を「勉学の終わり」とし、しかも、その成果をご破算にして、いわば白紙状態で新しい世界に飛び込む人生の転機と考える古い発想とははっきりと決別しなければなりません。確かに皆さんは何らかの意味で新しい世界に入ることになりますが、皆さんがこの数年にわたって本学において獲得した成果は今やあなた方自身と一体のものであり、これを粗末に扱うことは自らを粗末に扱うことであるということを肝に命じ

て、より充実した自らの人生を実現するための大切な礎にしていただきたい。日本のこれまでの知的生活の問題の一つは次々と学んだものを卒業していき、あらゆる状態に適応しつつも、結局自らは何者であるかについて思考する習慣を継続的に喪失してきた点にありました。こうした卒業現象は知的生活の底の浅さにつながっているわけですが、最近、財界人などの間でも哲学などの必要性を強調する意見が目立っているのは古い卒業現象型適応が一種の自家中毒現象を生みだし、自縄自縛を招いているからだと思います。ある意味で人間は自ら考える動物であり、端的に言えば自らと社会を解釈し続ける動物です。この習慣を維持することは本人にとっても、自らの属する組織にとっても、貴重なものであることを皆さんに是非とも銘記していただきたい。

ところで人生は歴史の刻印を免れることはできません。日本が高度成長を謳歌していた時代には時間は常にわれわれの味方であり、個人の能力その他を不問に付すような形でシステムが魔法のような効果を発揮しているように見えました。しかし、皆さんが物心ついて以降はシステムの機能不全が目立ち、時間は無気味なクレバスをあけてわれわれを待っているように見えてきました。相互信頼過剰と見られていた日本社会は今や相互不信増幅社会となり、他のバッシングによって自らの免罪符を手に入れようとする粗雑な議論が横行するようになりました。その典型的なものとして、日本経済の不振の最大の原因を大学の研究教育に求めるような議論があります。しかし、あたかも大学が莫大な不良債権の原因であるかのような議論は正気の議論とも思えません。また、大学から成功赫赫たるベンチャー企業が大量に発生し、そこに日本経済の回復シナリオの一つの核心があるといった発言が新聞紙上に溢れていますが、私はこうした議論が「奇跡」頼みのものではないかということを心から恐れております。他の先進諸国と比較して日本の高等教育への投資が対GDP比で圧倒的に低いことはすでによく知られております。それは皆さんがこの数年間を過ごした施設の貧弱さに如実に現れております。こうした事実を無視し、その上極端な悲観論に基づいて勝手な大学バッシングを繰り広げることは自ら墓穴を掘るようなものです。

この過度の楽観論と過度の悲観論の振幅は日本社会に特有のものではありませんが、日本社会がこの一世紀の間に二つのシステムについてこの巨大な振幅を味わったことははっきりしています。言うまでもなく、大日本帝国システムと高度経済成長システムの二つをめぐる歴史ドラマがそれに相当します。これはわれわれのユニークな歴史的経験です。少なくとも、他のアジア近隣諸国にはこうした経験は皆無です。しかし、このユニークさを指摘して満足することがここでのテーマではありません。

問題の核心は二つあります。第一は、何故にこのような極端な振幅が起こったのか、特に、何故にこうしたシステムの失敗が起こったのかという問題です。勿論、外部勢力の「陰謀」に全ての原因を求めようとする人々に事欠くものではありません。そこでもっと限定的にいえば、仮にわれわれのシステムに問題があったとすればそれはどこにあったのかという問いかけです。夏目漱石の『三四郎』の冒頭部分において三四郎が日本は「亡びるね」という言葉を発する人物に出会って驚愕する場面がありますが、その場面に示唆されているように問題が知的、精神的なものであればわれわれそれぞれの問題であり、特に、大学において教育に従事している者は無視するわけにはいきません。これは技術的・専門的知識の問題とは次元を異にした思考態度に関わるものであり、人間の社会生活に関わる重要問題の洞察力と解決能力に基本的な問題があったということでしょう。

第二は、この二つのシステムをかつてと同じように繰り返すことはできないし、あるいは、すべきでないという点に関わります。今から百年前に立ち戻り、ナイーブに自らの可能性について構想するにはわれわれは余りにも重い歴史体験を重ねてしまいました。丁度今から百年前、本学の前身の一つである第一高等学校の寮歌として有名な「嗚呼玉杯に花うけて」が発表されましたが、あそこに漂う健康なナイーブさをわれわれは失ってしまいました。しかし、そのことを嘆いたり、過去を「なかったことにする」のは新たな混乱と新たな失敗の原因を自ら作ることにつながるだけです。むしろ、それらを精神的な糧として将来のシステムを構想することが課題だと考えられます。次のシステムの実像はこれから刻まれ、自らの資源と制約条件の下で創造されなければなりません。しかし、兵器やモノ、カネに頼り切るよりも知恵と自発性を軸に新たな公共性を構想することを前提にするものであることは容易に想像されます。その意味でナショナリズムと経済成長という二十世紀的シナリオしか見られないこの地域において先駆的な意味を持つ試みと考えられます。皆さんの世代が見事にこの挑戦において成果をあげるよう大いに期待しております。

こうした歴史の変わり目は何時の場合にも若い世代に格好の活躍の舞台を与えてくれます。「運命の女神」は絶えず挑戦する若者の友人であるということが言われてきたのは決して偶然ではありません。そこから新しいリーダーが随所に出現するはずでありますが、それへの踏みならされた平坦な道はありません。道は見通しが利かず、常に果敢な挑戦によって切り開かれるべきものとなります。また、安定したように見える組織はその安定性の故に早晩危機に見舞われるのは今や周知の事実です。どのような豪雨や洪水にもびくともしない堤防があるという前提そのものが崩れてしまいました。これは一見異常な事態のように見えますが、長い歴史からすれば成功への平坦な道があるかのように考えていた時代こそむしろ例外であったという現実を認識すべきです。

盤石な堤防がある時代は羨ましく見えるかも知れませんが、実は自由が窒息し、画一化とマニュアル化が進み、精神的には不毛な時代でありました。現在の日本の抱えている最大の問題はこのような精神的不毛が社会の仕組みに深く浸透し、身動きできない状態をもたらした点にあります。逆にいえば、皆さんはこうした自由の窒息状

態を免れ、安定を少々犠牲にしてもそれを補って余りある自由な思考と自由な挑戦を享受できると思います。皆さんがアニマル・スピリッツとでもいうべきものを発揮して果敢に大きな荒波に正面から挑戦するか、それとも、粘り強く活動を続けることによって手作りの堤防と実りある自由を享受できる道を選択するのか、それは各人の選択にかかっています。しかし、「寄らば大樹の陰」とばかりにありもしない大樹を求めて空しく人生を送ることだけは考え直すべきであろうと思います。

皆さんはこの数年大学で学び、幾許かの専門的知識を身に付けたことでしょう。同時に注意すべきは専門的知識の持ち主だけで社会システムは存続できないし、健全なバランスを維持できるものではないという点です。社会が一定程度良好な状態を維持するためには人間の共存関係の質を処理していく的確な知恵と道義性を備えた人間を必ず必要とし、そのような指導者を必要とします。若し、皆さんが社会において指導的な立場を求めようとするならば、自らのそうした知的・精神的力量についての厳しいテストを覚悟し、しかも、報われないことを覚悟した上での挑戦であることを予め認識すべきでしょう。不用意にそうした立場を求めることは本人にとっても社会にとっても誠に有害無益です。この点で人間世界は今も昔も苛烈であることを忘れてはなりません。そして、どのような人間がそうした立場にふさわしいかについて常に冷静な判断力を持ち、また、自らについて自省の態度を持つことを忘れないようにしていただきたい。

東京大学は皆さんの前途への大きな期待を込めて、本日本学名誉教授小柴昌俊先生にご列席をいただき、特別のスピーチをお願いしております。小柴先生は本学の理学部の教授を長い間にわたって務められ、輝かしい数々の業績をあげられました。皆さんは東京大学宇宙線研究所の附属研究施設にスーパーカミオカンデという研究施設があり、そこでのニュートリノの観測研究が世界的な業績をあげていることを知っていることと思います。小柴先生は一九八三年にその前身であるカミオカンデを作られ、八七年には超新星からのニュートリノをそれによって初めて検出されました。これによって先生は「ニュートリノ天文学」を創始され、それがやがてスーパーカミオカンデにおけるニュートリノには質量があるという証明へとつながっていったのです。こうした御研究によって先生は仁科記念賞を初め、日本学士院賞、文化勲章など数々の賞を受けられ、二〇〇〇年にはウォルフ賞も受賞されております。卒業生の皆さん、どうぞこの記念すべき瞬間を生涯の記憶に留めるよう、小柴先生のお話を聞いていただきたい。

それでは最後に、卒業生の皆さんが心身ともに健康を維持し、その人生が希望に満ち、何よりも悔いのないものとなることを心から祈念して告辞を終わることと致します。

平成十四年（二〇〇二年）三月二八日

東京大学総長
佐々木　毅

※なお、卒業式に来賓として、ご出席された英国オックスフォード大学　コーリン・ルーカス　総長　並びに東京大学　小柴昌俊　名誉教授のご挨拶文につきましては、次号（No.1237）に掲載いたします。

平成13年度東京大学学位記授与式総長告辞（修士課程）

告　辞

本日ここに修士の学位を得、授与式を迎えた皆さんに対し、心からお祝いを申し上げます。今日を期に社会に出る人、あるいは更に研究を続ける人とさまざまな進路があると思いますが、本学で培った力量を十分に発揮し、勇気をもって前途を切り開かれんことを切望しております。

さて皆さんは学部の卒業生に較べ、いわゆる専門的知識を多く身につけているはずです。ところである社会が専門的知識を身につけている人間をどのように遇し、どのように活用できるかは社会のあり方にとって非常に重要な意味を持ちます。専門的知識は一定の範囲における合理性を体現しておりますが、合理性が現実の世界において常に受け入れられる保証はありません。実際、自らにとって都合の悪い合理性には目をつむったり、あるいはそれを事実上無視する人々は多数存在しています。かくして専門的知識は常に人間的限界とでもいうべきものと衝突する可能性を含むことになります。

日本は今徐々にではありますが、専門的知識がより多く尊重される段階に入りつつあると思います。あらゆる領域における専門家の輩出と既成の手法に対する批判はこの変化の兆候です。そしてそのことがそれぞれの領域における合理的な判断の促進につながるかぎり、それは積極的に評価すべき現象であると言えます。先に指摘したような人間的限界の名の下に一部の人々の横暴が許される事態が少なくなっていくことは基本的にプラスと考えられるからです。大学がこうした専門家の養成に大きなエネルギーを注ぎ、その社会的な役割を果たしていくというのが、今後考えられる一つの展望であると思います。

日本の場合、この専門家輩出現象を裏側からいえば、官僚制の権威の低下ということにつながっております。日本の官僚制も元来は専門家の集団のはずでしたが、何時の間にか利害の調整にほとんどのエネルギーを使うジェネラリストの集団とみなされるようになり、彼らがその専門的知識の故に権威を持つという社会感覚そのものが急速に萎んでしまいました。そのため日本官僚制における権力と専門的知識との結合がすっかり緩み、そのアイデンティティ・クライシスが発生しました。随所において、専門家集団の影響力が浮上していることはそれを別の面から示したものです。

ところで私はこれまで専門家という言葉を何となく使ってきましたが、英語でいえばこれにはスペシャリストとプロフェッショナルという二つの言葉が対応しています。前者は専門分化した特定の領域の専門家という以上の意味を持ちませんが、後者はその語源からして明らかなように重い公的使命と社会的責任を付託された職業を担うことを意味しています。

そこで専門的知識を持った人々の役割が大きくなる時代に船出しようとしている皆さんは一体このどちらの専門家たらんとしているのでしょうか。このスペシャリストとプロフェッショナルとの大きな違いは自らの知識を基にした活動に対して人格的コミットメントをどの程度強く持っているかにあります。あらゆる専門的知識においてこうした要素が決定的な意味を持つわけではありませんが、他の人間を相手にその専門的知識を駆使する場合にはこの区別は特に重大な意味を持つことになるでしょう。そしてこの人格的コミットメントは専門的知識が先に述べたような人間的限界に出会ったときに決定的に試されることになります。そこでの対応は専門的知識の存在感に大きく影響し、場合によっては信頼の失墜につながることもあるでしょう。日本において専門的知識が社会的な曙を迎えた現在において、専門的知識の持ち主は単なるスペシャリストを超えてプロフェッショナルとして活躍し、社会の尊敬を勝ち取るよう、奮闘することが必要になっています。

しかし同時に注意すべきは、専門家に対する信頼もまた常に相対化される時代にわれわれは生きているということです。例えば、専門家は専門的知識の独占者のように傲慢に振舞うことが許される時代ではありません。また、技術的合理性のみで突っ走ることができる時代でもありません。むしろ、行為しながら考え、あるいは反省しながら、問題の複雑な側面を一つ一つ解決して行くような視線が求められるようになってきました。このことは当然のことながら、プロフェッショナルには人間的・人格的関与を含む高度の創造的な能力、鋭敏な問題発見能力が多かれ少なかれ求められることを意味します。その限りにおいて、専門的知識なるものがあたかもモノのように存在し、専門家はそれを現実の事象に機械的に適用する役割を持っているといった物の見方は深刻な修正を余儀なくされることになります。

これは専門家の良し悪しや品質が厳しく見直されることを意味します。東京大学で修士号を得るということはある面で品質保証の意味を持ちますが、所詮、それには大きな限界があることを認識しなければなりません。一つには先のように人間的・人格的条件が問われるという点があります。如何なる大学も卒業生の人格の品質保証を数十年にわたって行うことはできません。これは各自が思考力を陶冶し、感性を磨くことによってのみ対応可能な課題です。もう一つは専門的知識が極めて容易に陳腐化するという、今日どこにおいても避けられない運命が待っています。例えば、法律一つとっても現在の日本は大立法時代に入っており、私自身法学部長時代には毎国会の終了後法律の専門家に法律を勉強していただく機会が必要だといったことを痛感したことがありました。ことほど左様に、専門家はかつてのように同じ環境の中で同じことを繰り返していれば済む時代とは全く違った環境に置かれています。正に現在は社会関係そのものの変動期であり、専門家が求められるようになっているわけですが、それだけに自らの知識の陳腐化に方法的に対応できない専門家はアリーナから早急に退場を余儀なくされることでしょう。これへの最も有効な対応策は既にお気づきのように大学との関係を効果的に続けることであると思います。

私は最初に専門的知識の役割が大きくなることはそれぞれの領域における合理性の高まりを意味すると申しました。この趨勢は歴史に根ざすものであり、太い流れとして今後も続いていくことでしょう。これまでジェネラリストが占めていた地位を押しのけて、その活躍の場はますます広がっていくことでしょう。しかし、現実の活動の場に即して考えると、それは以上概観したように単純なことではありませんし、個々の専門家がそれを実現する際に遭遇する障害は決して生易しいものではありません。また、専門家の時代の到来は個々の専門家の成功を保証するものでもありません。いずれにせよ、そうした中で合理性の高まりが何を意味するかについて常に自覚的に反省し、求められる人間的なコミットメントに注意を払いながら専門家として活動することが求められることは確かです。

ところでそうした専門的知識の輩出が社会の直面する困難な問題の解決能力を全体としてどのような意味で高めるかについては新たな考察が必要になります。専門的知識は一定の領域における合理的判断に寄与しますが、それが社会全体のそれに直ちに結びつくわけではありません。人間が専門的知識によって支配され、互いに分断されてしまうようなことになれば、俗に言うところの縦割りの弊害によって重要な案件がデッドロックに乗り上げることも考えられます。これを回避するためには専門的知識の輩出状況を十分に認知したジェネラリストの知恵がどうしても必要になることでしょう。それは専門的知識に自己の偏見をやみくもに押し付けるのではなく、こうした知識を踏まえて尚且つそれらを超えた包括的な展望を追求するようなジェネラリストのことでしょう。こうしたジェネラリストの存在を前提にすることによっ

て、専門的知識もより大きな合理性に与ることができ、本当の意味で生きてくることでしょう。

日本には古いタイプのジェネラリストは数多く存在しています。特に、それは永田町・霞が関界隈に数多く見られると言われています。しかし、こうしたジェネラリストの有効性は歴史によって今や追い抜かれたように見えます。その一方で専門的知識と旧来のジェネラリストとの間の緊張は高まりつつありますが、この矛盾や対立を一定程度高めることによって初めて新たなジェネラリストへの展望が開けてくるようにも見えます。官僚制の抱えた矛盾もこの緊張の高まりと同種のものと考えられます。その意味で現在の日本はなお知の配置図における混迷と逡巡とによって支配されているといわざるを得ないでしょう。かくして専門的知識の持ち主はジェネラリストを無視するのではなく、その実像に対して深い関心を持ち、その質的向上に向けてはっきりと発言をしていく必要と義務があります。プロフェッショナルの団体が自らの既得権益の擁護に専念するようでは到底そうした義務と責任を果たしたことになりません。プロフェッショナルがプロフェッショナルらしくなり、そのことと相俟ってジェネラリストの質的向上が実現していくというのがあるべき構図であるはずです。プロフェッショナルの団体が既得権益を通して古いタイプのジェネラリストと結託するというのがあたかも当然のように考えられていた時代は明らかに歴史的合理性を失いつつあります。皆さんのような若い世代のエネルギーによってこの隘路が切り開かれ、専門的知識が本当に生きてくる時代がこの社会に一日も早く来るよう願っております。

最後に皆さんそれぞれの前途が幸運に恵まれ、それぞれに悔いのない人生を送られることを祈念して私の告辞と致します。

平成十四年（二〇〇二年）三月二九日

東京大学総長
佐々木　毅

平成13年度東京大学学位記授与式総長告辞（博士課程）

告　辞

本日ここに長年にわたる勉学の結果として博士号を取得された皆さんを迎え、授与式をとり行うことができましたことは私の非常な喜びとするところであります。

本年度本学において博士号を取得された方々は九五四名にのぼり、皆さんに対して、心から祝意を表します。また、長い間にわたって皆さんの勉学をささえられたご家族の方々に対しても深い敬意を表する次第です。今年はこれまでと異なり修士号、博士号の学位記授与式を別々に行なうことに致しましたが、これは従来の学位記授与式が大学院重点大学のそれにしてはやや配慮において十分ではなかったとの私なりの反省に基づくものであります。また、安田講堂の内部にご家族の方々に入っていただいたのは、長年にわたる成果を皆さんと同じ儀式空間で喜んでいただきたいと考えたからです。また、来年以降は別の新機軸を考えております。その一方で私は多数の告辞を用意しなければならない状況に追い込まれ、歴代の総長が体験されなかったような苦境に追い込まれた点については少なからず御同情をいただきたく存じます。

言うまでもなく、学問研究の世界においては終点はありません。しかし、幾つかの「区切り」があることは事実であり、博士号の修得はその最も大きな「区切り」であることは明らかです。同時にそれは外から課せられる他律的な「区切り」の最後のものであり、今後は自ら課する「区切り」しかない世界へと皆さんは入っていくことになります。研究者として独り立ちするということは、正に外から課せられる「区切り」がなくなり、自らの研究戦略のみを頼りに研究を進めることを覚悟することに他なりません。指導の役割を負ってきた教官が長い時間をかけて博士号を修得した学生を見る心境は、さながら子供が独り立ちしていくのを見る時に親が感ずるほっとした心境に非常によく似ております。この教官の心境を裏切ることなく、博士号といういわば研究者としての独立宣言を手に入れたことを機に新たな活動に向け、そのエネルギーを爆発させていただきたい。

ところで研究生活はその静かな外観とは異なり、絶えざる内面的な焦燥と葛藤によって彩られています。研究の独創性は未知なるものとの取り組みを前提とし、その当初の目論見が達成される確実な見込みに立脚するものではありません。そこでは最小限であれ、「リスクをとる」ということが前提になります。「リスクをとる」ことは研究の目論見が実現しない可能性を常に含んでいるため、不安と内面的葛藤は止むことがありません。それだけに研究の目論見が達成された場合の快感と達成感は一段と素晴らしいものとなります。しかしながら、この達成感は次の未知なるものへの関心によって直ちに相対化され、新たな「リスクをとる」作業が始まることになります。こうしたことの繰り返しを何故に続けるのかという問いが発生することは避けられません。

また、「リスクをとる」ということの中には他の研究者や社会によってその研究がどのように評価されるかという、別の要因も含まれていないわけではありません。今日のように学問の世界がグローバル化されている中では、重要な研究は一定の時間の中でそれなりに公平な評価を受けるチャンスが大きくなっていますから、運不運の要素が持つ意味は少なくなっていると思います。しかし、人間世界では自己評価と他者による評価とは永遠に一致することはありませんから、そこに不満や葛藤が蓄積する可能性は常に存在します。しかも、学問研究の場合には自らの選択という契機が大きいため、これが一層募るということもあるでしょう。なお、日本では「リスクをとる」人材が少ないなどと言われておりますが、研究を志す人々こそ正に「リスク・ティカー」であると考えられます。「リスク・ティカー」が乏しいという問題

はむしろ大学の外の問題であることをこの際銘記すべきでしょう。

こうした特徴を持つ研究生活の最大の危険は研究を志向する「内面のバネ」とでもいうべきものが切れてしまうことです。他の職業においてもこうしたモティベーションの低下現象はありますが、研究生活においてはこれは直ちに致命傷になると考えられます。博士号を修得した段階での「内面のバネ」は瑞々しく、潜在的可能性に満ちておりますが、未だ強靱さを備えておりません。意味のある研究生活を続けるということはこの「内面のバネ」を甘やかし過ぎることなく、慎重に鍛え、強靱なものにしていくということに他なりません。皆さんにはこの「内面のバネ」を倦まず弛まず鍛えていただきたい。そうすれば一定の評価は必ずや得られると確信しております。

ここで、皆さんの前途に横たわっている一つの大きな社会的問題に言及せざるを得ません。それは大学・研究所を除き、日本の諸組織が博士号を持つ人々に対して極めて閉鎖的であるという点です。この状態を解消しない限り、日本における人材の有効活用は極めて困難であるというのがわれわれの判断です。一方で、日本の組織は官庁に見られるように学位に無関心なところがあり、長い間にわたってそれに安住してきました。昨今、高度先端技術開発による産業の活性化が言われつつも、事態に大きな変化が起こっているという話はほとんど耳にしません。大学の知的資源の活用を唱えつつ、博士号修得者に門戸を広く開けるわけでもないということでは、日本の経営者は一体何を考えているのか分からなくなります。文部科学省は博士号修得者を採用するメリットを訴え始めておりますが、その影響はなお限定的であるといわざるを得ません。他方、大学の方はこの三十年余り、学問研究のための学問研究の傾向がますます強くなって来ました。これは私の体験からしてもかなり確実に言えることです。そしてそれが日本の研究水準の国際的飛躍など多くのプラスを生み出してきた反面、先のように博士号修得者の増加にもかかわらずその活動の場がなかなか広がらないという現象の一因になったとも考えられます。ご存じのように、現在は博士号修得者への門戸開放よりも、専ら産学連携の推進に傾いている状況にあります。

この問題について大学にできることは限られていますし、特に、即効性のある対策が手許にあるわけではありません。しかし、この問題を超えてわれわれ研究者として考えるべき点として、「何のために」（for what ？）という発想をもう少し念頭に置くという課題が考えられます。改めて述べるまでもなく、この問題は細心の注意を払って取り扱う必要があります。若し、「何のために」を極めて即物的で目先の利便性といったものに限定するようなことがあれば、学術研究は自滅の道を辿ることになります。実際、大学という組織の最大の特徴はそのメンバーがこの「何のために」を極めて自由に設定し、自由に構想することができる点にあります。このことを放棄すれば大学は自滅するか、他の組織と大差のないものになってしまいます。従って、世間の目からすれば甚だ迂遠としか言えない「何のために」であっても大学はそれを守らなければなりませんし、守るべきです。しかし、このことと学問研究はおよそ「何のために」という発想と無関係であるべきだという主張とははっきり違います。

私がここで言おうとしているのは、この「何のために」をもう少し意識に上らせ、そうしたことについてお互いに語ることを躊躇しないようにしようということに尽きます。先程の言葉を使えば、「何のために」という問いは「内面のバネ」とも決して無関係ではないでしょう。そして、基礎とか実用とかいった既存の枠組みに頼って事柄を処理することは却ってこの問いの顕在化を妨げることにつながります。互いの研究に十分な敬意を払いながら、新たな飛躍と結合を求めてこうした語り方をもっと日常化させていくことは研究者としての大事な任務であると考えます。これは今後の大学運営においても大事なポイントですが、そのことはまた研究者と社会との接点を広げ、やがては人材の流動化にもつながる可能性を秘めているように思われます。

さて、博士号を得られた皆さんは今や東京大学の教育体系から自由になり、自らの力で研究の前途を切り開くべき時点に立っております。その活動がどこにおいて行なわれるにせよ、本学の博士号修得者にふさわしい活躍をされることを心から祈念して告辞と致します。

平成十四年（二〇〇二年）三月二九日

東京大学総長
佐々木　　毅

≪ 一般ニュース ≫

副学長の就任

４月１日付けで、廣渡清吾総長特別補佐が就任した。

廣渡　清吾
（任期：平成14．４．１～平成15．３．31）

1968．３　京都大学法学部卒業
1991．４　教授（社会科学研究所）
1998．４～2001．３
　　社会科学研究所長
2001．４　総長特別補佐
〔所属講座（研究部門）〕
比較現代法部門
〔専門分野〕
ドイツ法・比較法社会論
〔研究内容（代表的な著書や論文等）〕
「法律からの自由と逃避」（日本評論社）、「統一ドイツの法変動」（有伸堂）

部局長の交代

このたび、次のとおり部局長の交代があった。

部局名	新部局長	旧部局長
大・法	菅野　和夫	渡邊　浩
大・工	大垣　眞一郎	小宮山　宏
大・育	渡部　洋	藤田　英典
数　理	薩摩　順吉	岡本　和夫
学　環	原島　博	濱田　純一
医　科	新井　賢一	（再　任）
東　洋	田中　明彦	原　洋之介
生　研	西尾　茂文	坂内　正夫
物　研	福山　秀敏	（再　任）

大学院法学政治学研究科・法学部
菅野　和夫　教授
（任期：平成14．４．１～平成16．３．31）

昭和41．３　法学部卒業
昭和55．11　教授（法学部）
〔所属講座（研究部門）〕
社会法政策
〔専門分野〕
労働法
〔研究内容（代表的な著書や論文等）〕
労働法第５版　補正版第２版、
Japanese Employment and Labor Law

大学院工学系研究科・工学部
大垣　眞一郎　教授
（任期：平成14．４．１～平成16．３．31）

昭和49．３　大学院工学系研究科博士課程修了
平成元．４　教授（工学部）
〔所属講座（研究部門）〕
都市環境工学
〔専門分野〕
水環境工学、水質変換工学
〔研究内容（代表的な著書や論文等）〕
水中健康関連微生物制御、水循環と流域環境

大学院教育学研究科・教育学部
渡部　洋　教授
（任期：平成14．４．１～平成16．３．31）

昭和53．10　アイオワ大学教育系大学院博士課程修了
平成４．11　教授（教育学部）
〔所属講座（研究部門）〕
教育心理学
〔専門分野〕
教育情報科学
〔研究内容（代表的な著書や論文等）〕
「入試データの解析」（新曜社）、「心理検査法入門」（福村出版）、「ベイズ統計学入門」（福村出版）

大学院数理科学研究科
薩摩　順吉　教授
（任期：平成14．４．１～平成16．３．31）

昭和51．５　京都大学大学院工学研究科修了
平成４．４　教授（大学院数理科学研究科）
〔所属講座（研究部門）〕
数理解析学大講座
〔専門分野〕
応用数理、数理物理学
〔研究内容（代表的な著書や論文等）〕
非線形可積分系、非線形差分方程式、「確率統計」「物理の数学」「微分積分」（岩波書店）

大学院情報学環・学際情報学府

原島　博　教授

（任期：平成14．4．1～平成16．3．31）

昭和48．3　大学院工学系研究科修了
平成３．1　教授（工学系研究科）
〔所属講座（研究部門）〕
情報と表現学域
〔専門分野〕
コミュニケーション工学、メディア工学
〔研究内容（代表的な著書や論文等）〕
情報と符号の理論（岩波書店）、顔学への招待（岩波書店）

医科学研究所

新井　賢一　教授

（任期：平成14．4．1～平成15．3．31）

昭和49．3　大学院医学系研究科修了
平成元．4　教授（医科学研究所）
平成10．4～医科学研究所長
〔所属講座（研究部門）〕
基礎医科学大部門
〔専門分野〕
生化学、分子生物学、分子免疫学、情報伝達学
〔研究内容（代表的な著書や論文等）〕
細胞周期の制御とDNA複製、サイトカインネットワークとシグナル伝達、T細胞と遺伝子発現の制御、東京ゲノム・ベイ計画（講談社）

東洋文化研究所

田中　明彦　教授

（任期：平成14．4．1～平成16．3．31）

昭和56．9　マサチューセッツ工科大学政治学部大学院博士課程修了
平成10．4　教授（東洋文化研究所）
〔所属講座（研究部門）〕
汎アジア研究部門
〔専門分野〕
国際政治
〔研究内容（代表的な著書や論文等）〕
「世界システム」（東大出版会）、「日中関係1945－1990」（東大出版会）、「新しい「中世」」（日本経済新聞社）、「ワードポリティクス」（筑摩書房）

生産技術研究所

西尾　茂文　教授

（任期：平成14．4．1～平成16．3．31）

昭和52．3　大学院工学系研究科修了
平成７．4　教授（生産技術研究所）
〔所属講座（研究部門）〕
情報・システム部門
〔専門分野〕
熱制御工学
〔研究内容（代表的な著書や論文等）〕
相変化現象など熱事象学、ヒートパイプ、ヒートシンクなど熱制御デバイス工学、ソフトエンジンなどエネルギー工学

物性研究所

福山　秀敏　教授

（任期：平成14．4．1～平成15．3．31）

昭和45．3　大学院理学系研究科博士課程修了
昭和59．4　教授（物性研究所）
平成11．4～物性研究所長
〔所属講座（研究部門）〕
物性理論研究部門
〔専門分野〕
物性理論
〔研究内容（代表的な著書や論文等）〕
超伝導、磁性を中心とする固体電子論

部局長退任挨拶

プロとしての部局長

前大学院法学政治学研究科長・法学部長　渡辺　浩

「日本の国立大学には経営や管理運営のプロがいない、などと言う人がいる。誤りである。腕利きの事務官がいるというだけではない。そもそも教官の職務は、研究・教育・管理の３領域である。そして、とりわけ部局長に選ばれるような人は、早くから多種多様な役職の経験を積んで経営能力を磨き、しかも、その分野と大学全体の諸事情に精通している。それ故に、現に本学のように、ダイナミックで、しかも安定感のある経営が実現しているのである。その意味で、少なくとも東大の場合、管理の役を務める教官は、パートタイマーではあってもアマチュアではない。多くは辣腕のプロである。研究と教育の現場に無知な『経営一般のプロ』などは、到底その実力に及ぶまい。」

この２年間、他の部局長の水際だったお仕事振りに直かに接し、以上のことを繰り返し痛感させられ、自ら身の引き締まる思いを致しました。この４月からは、只の

一教官として、素晴らしいプロたちに声援を送ります。

知識の構造化が鍵

前大学院工学系研究科長・工学部長　小宮山　宏

この２年間を振り返ってみれば、コラボレーションプラットフォーム、教育プロジェクト、医工連携など、当初の思いの半分近くをスタートさせたというところだろうか。しかし、それはまさに手をつけただけであって、実践はこれから。一緒に推進してきたいわば戦友達である新執行部の苦労を思うと、不謹慎かもしれないが、正直ほっとしている。

個人的には、知識の構造化が本質かなという思いが、確信に変わっていくプロセスでもあった。領域の細分化と問題の複雑化によって全体像を把握できない個人と組織、それが、国内外を問わず、現状のさまざまな困難の根源にある。その解は、知識の構造化。「知識の構造化５大プロジェクト」は、研究科長・学部長として協力を求めることができたからこそ、立ち上げられたのだと思う。大学人として、知の再構築を目指すこのプロジェクトへの、コミットメントを強めたいと考えている。

「組織化されたアナーキー」のゆくえ

前大学院教育学研究科長・教育学部長　藤田　英典

26年前『IDE―現代の高等教育』という雑誌に大学の学長職に関する紹介論文を書いたことがある。スタンフォード大学で小生の師の一人であったＪ・マーチ教授たちの著書を紹介したもので、「組織化されたアナーキー（organized anarchy）「ゴミ箱モデル（garbage can-model）」といった概念によって大学を特徴づけ、かかる組織における学長のリーダーシップを論じたものである。

学長職が実際にどういうものかは小生にはわからないが、この２年間の学部長経験は、マーチ教授たちの指摘は学部や学部長職にも当てはまると感じるものであった。重要な意思決定は教授会で行われるが、その多くは、蓄積された規則・慣行とコース等の利害と研究者の信念によって予め決まっており、変化する状況のなかで創造的な判断をしていく積極性が乏しいと感じられた。

むろん、学部長の判断やリーダーシップが重要でないということではない。日常的な小さな判断が重要な結果を招くことも少なくない。しかし、様々の外圧に対応せざるをえない場合はともかく、自主的・創造的に対応すべき重要な局面で学部長がリーダーシップを発揮することのできる余地は必ずしも大きいものではない。それが、この２年間の実感である。

法人化をはじめ、大学・部局や研究・教育を取り巻く環境は大きく変化している。研究・教育の倫理と使命はそう変わるものではないであろうが、こんにち組織としての選択はもっと大胆かつ賢明なものであることが期待されているように見受けられる。「知性と良識の府」としての適切な自己変革と発展を期待してやまない。

次の十年

前大学院数理科学研究科長　岡本　和夫

４年間研究科長を務めて記憶に残ることは確かにたくさんある。そこで、一番印象的なことを広報に書いておけば人助けになるのだろうが、本人は済んでしまったことはもうどうでもよい。後引いて終わっていない話というと、法人化等枚挙に暇がないが、個人的には定年制の延長ということが大きい。定年まで勤めるならまだ十年あるわけで、もう一仕事してみようか、という気分になるのがふつうの人情である。で、いろいろ考えているが、ふと大学院数理科学研究科がちょうど十周年であることに気がついた。過去を祝うことは、将来に思いを託すことだから、新しい十年間はこれまでの十年間に気兼ねをする必要は全然無い。奇を衒うのは数学的ではないから、地道にしかし着実に進んで、十年後にどう変わっているのか楽しみにしよう。個人的にも、もう一仕事しよう！次の十年、みなさんがあっと驚くことができるかどうかわからないが、へぇーとぐらいは言われてみたい。毎週多くの人と顔を合わせていたおかげで、東京大学には多士済々、面白い人と話がそこら中に転がっていることを改めて認識した。今後ともよろしく、と前もってお礼を述べつつ、これまでのことについては重ねて感謝の気持ちを、東京大学の皆さんに申し述べます。

退任にあたって

前大学院情報学環長・学際情報学府長　濱田　純一

情報学環・学際情報学府が発足して２年がたち、最初の修士課程修了生の誕生にあわせて任期を終える。この新しい大学院は、教育組織と研究組織の分立、他部局から流動してくる教官が３分の２と、情報分野の学際的な教育・研究にふさわしい組織形態を生み出した。東大が新しい時代を迎える魁として、伝統的な大学院の姿に新たな文化を付け加えたものと自負したい。大講堂・赤門のライトアップ「知の光」も良い思い出である。それぞれに才能豊かな先生方、また少数精鋭で大奮闘の事務方に支えられて、組織立ち上げの２年を全うすることができた。本部の総長室や事務局の大きなご支援にもお礼を申し上げたい。私個人にとっては、社会情報研究所の所長、学環設立プロデューサーを経て、都合７年間の長い旅をやっと終える。この間、私の専門である情報法、情報政策の分野の学問の発展は著しく、切歯扼腕の思いであった。これから、情報学環という広範な分野の知に接することのできる恵まれた場で、教育者、研究者としてのプライドを取り戻したいと考えている。

所長を辞めるに際して

前東洋文化研究所長　原　洋之介

振りかえってみると、4年間は意外に短かったような気がしている。2期所長職にあった間、附属施設の新設から、法人化への対応、また全国の研究所長会議の会長まで、種々の仕事に振りまわされた。何ひとつ着実な成果をあげることは出来なかったと反省しているが、それでも研究所の仲間がいなければ、何ひとつ仕事が出来なかったことだけは確かである。

意図せず2期にわたったため、2人の総長と3人の事務長に接することとなった。そしてまた、多数の部局長とも親しい交流が出来た。所長に就任しなかったら持ち得なかったこれらの人的ネットワークは、私個人の貴重な財産になっている。これから普通の研究活動に復帰するが、この人的ネットワークを活用して、自分なりに新しい研究を、定年までに作り上げていこうと思っているところである。

退任の挨拶

前生産技術研究所長　坂内　正夫

所長としての2期4年を振り返ってみると、「大学改革」「大学法人化」の流れの中で、実に多くのエネルギーを費やした。生研でいえば、それ以前の10年間より多くの改組・変革を行なったと思う。そして、東京大学全体が今後もっとこのような努力の継続が不可避の状況にある。しかし、退任に当って、次の1点を最も重要なポイントとして指摘しておきたい。即ち、実現されるべきは「形の変革」ではなく「中味の変革」でなくてはならない、ということ。我国ではよく、先ず「形」を作って「中味」はそれに合わせるというやり方が行われるが、今問われている「グローバル化」への対応の本質は、「中味」が「形」をつくるという逆のやり方なのだということです。

「東大の変革」が「中味の変革、実の変革」であって、他所ではできない価値を社会に発信することに繋がることを祈念してやみません。

卒業式行われる

平成13年度卒業式が、3月28日（木）に、大講堂（安田講堂）において挙行された。式には、約3，014人の卒業生（卒業者数3，407人）とその父母など約2，600人（いずれも2回の合計）が出席した。

佐々木総長をはじめ、小間・宮島副学長、廣渡総長特別補佐、附属図書館長、当該学部の学部長・代表教官、事務局長、来賓の英国オックスフォード大学ルーカス総長、小柴昌俊名誉教授が壇上に列席し、1回目文系学部は9時30分、2回目理系学部は11時40分の開式となった。

本年の卒業式は、一年ぶりに卒業生全員が大講堂に入れるよう文系学部と理系学部ごとの2回に分けて行われ、また父母控室である法文2号館31番教室、文学部3番大教室及び文学部1番大教室にはモニターを設置し、大講堂での式の模様を放映した。

式は2回とも、まず、音楽部管弦楽団による、バッハ作曲の「管弦楽組曲第一番」が演奏され、壇上列席者の紹介があった後、佐々木総長から、各学部卒業生代表に、順次、学位記が授与された。

続いて、佐々木総長から卒業生に約15分間にわたって告辞が述べられ、文系は英国オックスフォード大学ルーカス総長から約20分間にわたり英語で挨拶をいただき、理系は小柴昌俊名誉教授から約20分間にわたり挨拶をいただいた後、最後に音楽部コールアカデミーと出席者全員による学生歌「足音を高めよ」及びスコットランド民謡「蛍の光」の合唱をもって式を終了した。

なお、2回目の式終了後、14時00分まで、卒業生及び父母などに大講堂を開放した。

▲英国オックスフォード大学　ルーカス総長

▲小柴昌俊名誉教授

学位記授与式行われる

平成13年度学位記授与式が、３月29日（金）に、大講堂（安田講堂）において挙行された。

式には、約１，800人の修了者(修了者数３，436人(修士課程２，482人、博士課程954人)）とその父母など約998人が出席した。

本年の学位記授与式は、修士課程と博士課程ごとの２回に分けて行われ、修士課程修了式は、昨年度同様に、父母控室である法文２号館31番教室及び文学部３番大教室に、モニターを設置し、大講堂での式の模様を放映した。また、博士課程修了式は、父母等も大講堂に入場して行われた。

佐々木総長をはじめ、小間・宮島副学長、廣渡総長特別補佐、附属図書館長、各研究科委員会委員長、各研究所長、事務局長が壇上に着席し、１回目（修士課程）は９時30分、２回目(博士課程)は11時30分の開式となった。

式は２回とも、まず、音楽部管弦楽団による、バッハ作曲の「管弦楽組曲第一番」が演奏され、壇上列席者の紹介があった後、佐々木総長から、各研究科の修了者代表に、順次、学位記が授与された。

続いて、佐々木総長から修了者に約20分間にわたって告辞が述べられ、式を終了した。

なお、２回目の式終了後、13時30分まで大講堂を開放した。

平成14年度入学者数決まる

平成14年度新入生の人数は、次のとおりである。

科　類	入学定員	合格者数			入学辞退者数	入学者数	入学定員との差	定員外の入学者数		入学者総数
		一般選考	特別選考（第2種）	合　計				国費留学生等	特別選考（第1種）	
文科一類	605 (605)	606 (606)	8 (6)	614 (612)	1 (2)	613 (610)	+8 (+5)	3 (3)	1 (2)	617 (615)
文科二類	365 (365)	365 (366)	3 (1)	368 (367)	2 (0)	366 (367)	+1 (+2)	4 (3)	3 (3)	373 (373)
文科三類	485 (495)	486 (496)	4 (4)	490 (500)	1 (2)	489 (498)	+4 (+3)	5 (7)	2 (2)	496 (507)
理科一類	1,147 (1,147)	1,157 (1,156)	3 (4)	1,160 (1,160)	10 (9)	1,150 (1,151)	+3 (+4)	26 (21)	6 (5)	1,182 (1,177)
理科二類	551 (551)	559 (558)	2 (2)	561 (560)	9 (6)	552 (554)	+1 (+3)	1 (0)	3 (2)	556 (556)
理科三類	90 (90)	90 (90)	1 (0)	91 (90)	0 (0)	91 (90)	+1 (±0)	0 (0)	0 (0)	91 (90)
合　計	3,243 (3,253)	3,263 (3,272)	21 (17)	3,284 (3,289)	23 (19)	3,261 (3,270)	+18 (+17)	39 (34)	15 (14)	3,315 (3,318)

（注）　１．（　）内は、昨年度を示す。

２．国費留学生等の人数には、国費留学生の他に政府派遣留学生、日韓共同理工系学部留学生を含む。

≪ 部局ニュース ≫

文学部・人文社会系研究科の事務改善提案表彰について

文学部・人文社会系研究科では、事務の合理化、効率化に資する改善策を提案した者を表彰することにより、事務職員の資質の向上と組織の活性化を図ることを目的として「文学部・人文社会系研究科事務改善提案表彰実施要領」を昨年11月研究科長裁定により制度化した。

これは、事務部に所属する全ての事務職員を対象にして、事務職員が日常の業務遂行の中で発案した改善策や斬新なアイディアを積極的に取り入れ、前例主義の弊害を取り除こうとのことからまとめたものである。

提案は、個人又はグループでの提案とし、いずれも随時行うことができるが、毎年２月末を年度の区切りとして、提案者が「事務の現状」、「改善策」及び「その効果」を書面で事務長宛提出するものとした。

平成13年度分として、個人提案８件及びグループ提案６件、計14件の事務改善の提案があり、慎重な選考を経て、去る３月15日、平成13年度最後の教授会においてこれら提案の中から『教職員人事データベースの作成について』と『韓国・朝鮮語図書データベースの学部内公開への試み』の提案２件を優秀賞、他の12件を奨励賞として研究科長から表彰状及び記念品を授与した。

（大学院人文社会系研究科・文学部）

東京大学外国人留学生後援会主催による「留学生スキー講習会」開催される

去る平成14年２月15日（金）から18日（月）にかけて、長野県栂池高原にて東京大学外国人留学生後援会主催による「スキー講習会」が開催されました。これは、同後援会が「本学に在籍する留学生交流を促進するために行う様々な支援活動」の一環として開催されるもので、今回で三回目となります。

今回は応募者約80名の中から抽選により選ばれた27名の留学生が参加しました。

一行は15日午後11時、本郷キャンパス龍岡門をバスにて出発、16日午前６時頃に栂池高原スキー場へ到着し、オリエンテーション等の後、早速、本学スキー部員及びＯＢの指導の下に講習会が開始されました。参加者の大半が初心者のため、数班に分けられ、ゲレンデまでのスキーの担ぎ方、準備運動、スキーの履き方から初滑り（初転び）へと講習は進み、コーチ陣のきめこまやかな指導により、午後には全員が緩斜面のコースを滑り降りることができるようになりました。

２日目の午前中は、スキーを行うグループとスキー場で開催された雪合戦に参加する２グループに分かれ、後者は初めての本格的な雪合戦を楽しみました。

１日半の講習を終えた頃には、丁寧な指導と本人の努力の甲斐もあって、とりわけ初心者として参加した学生の中にはめざましい上達をみせる者もおり、２日目の午後には全員で約６㎞の林道コースに挑み、皆無事に下山しました。今回のスキー講習会は天候に恵まれ、参加者全員が限られた時間の中で、思う存分にスキーを楽しみました。

食事は、２日間を通して、スキー部関係者及びボランティアによる、手料理が出され、一同大いに舌鼓を打ちました。また、食事の後にはジャンケン大会や、思い思いゲームに興じたりして、異なる国・地域から集まった留学生同士、また、スキー部関係者やボランティアと大いに親睦を深めることができました。

最終日は地元の村立小谷中学校を訪問し、中学生からの歓迎の挨拶に引き続いて、留学生からは母国並びに自己紹介が行われ、その後、いくつかのグループに別れて、それぞれ国際交流を深めました。

最初は緊張していた面々ですが、時間の経過とともにお互い打ち解けあい、予定の２時間はあっという間に過ぎ、名残を惜しみつつ同校を発ち、午後７時頃、無事に本郷キャンパスへ到着しました。

今回の講習会を無事に実施することができたのは、本学スキー部関係者、ボランティア、小谷中学校生徒及び教職員の絶大なるご協力と本会を支えていただいている会員各位のご支援の賜物であり、参加した留学生の積極的な姿勢にも助けけられて、実りある講習会になりました。ここにあらためてお礼申し上げる次第です。

（東京大学外国人留学生後援会）

≪ 掲示板 ≫

スポーツ・トレーニング（実習）開講のお知らせ

教養学部では、専門課程の学生を対象としたスポーツ・トレーニング（実習）を下記の通り開講します。授業内容は前期課程の身体運動実習に準じますが、水泳やマシントレーニングなど、独自の種目も開設されます（学期による）。学部、学科を問わず専門課程および大学院の学生であればどなたでも他学部聴講として履修できます。ただし、卒業に必要な単位の一部として認定している学部は現在のところ、法学部（２単位まで）、経済学部（２単位まで）、教養学部（超域文化科学科のみ１単位）、教育学部（２単位まで）、文学部（１単位）です。その他の学部・研究科では随意科目となります。

科 目 名：スポーツ・トレーニング

開講学部：教養学部後期課程

単　　位：１週１回90分、15回の授業で１単位を与える。

開講曜限および場所：

木曜３限（13：15～14：45）および４限（15：15～16：45）に本郷御殿下記念館および御殿下グラウンドで行う。

金曜５限（16：20～17：50）に駒場テニスコート（テニスのみ）で行う。

科目番号：905（木 曜３限）、906（木 曜４限）、907（金 曜５限）

本郷キャンパスでの開講種目と定員：３ 限（13：15～14：45）

トレーニング＊	40名
バレーボール	40名
卓球	20名

４限（15：15～16：45）

ソフトボール	40名
バスケットボール	40名
バドミントン	20名

＊マシンの使用を中心とした筋力トレーニング。受講によって御殿下記念館トレーニングルーム使用資格が与えられます。

駒場キャンパスでの開講種目と定員：金曜５限（16：20～17：50）

テニス	20名

ガイダンスおよび受講登録：本郷キャンパスでの開講種目については４月18日（木）上記のそれぞれの授業時間に法学部31番教室で行います。テニス（駒場）については４月19日（金）５限に教養学部生命環境科学系身体運動科学研究棟会議室で行います。なお、同一学期に２コマ以上履修することは出来ません。

問い合わせ先：教養学部生命環境科学系　八田助教授
（内線46862）
e-mail：hatta@idaten.c.u-tokyo.ac.jp
（大学院総合文化研究科・教養学部）

共済組合からのお知らせ

〈東京大学に来られた教職員の皆様へ〉

皆様は採用等により文部科学省共済組合東京大学支部の組合員になりましたので、「組合員資格取得届」を各部局の共済担当掛へ提出することとなっております。

また、扶養者がおられる方は「被扶養者申告書」も同様に共済担当掛に提出することとなっています。

まだ、「組合員資格取得届」等を提出されてない方は、早急に手続きくださるようお願いします。

なお、「被扶養者申告書」の手続きが遅れた場合、被扶養者の認定日が事実発生日以降となり、皆様の不利益となる場合がありますので、注意してください。

〈被扶養者の家族が就職された皆様へ〉

子供が就職した場合や配偶者が年額130万円以上（月額108,333円）の収入がある場合は、被扶養者の取消し手続きが必要となります。

なお、この手続きが遅れた場合、医療費の返還など皆様の不利益となる場合がありますので、注意してください。

上記手続き等について、ご不明な点がありましたら、各部局共済担当掛又は経理部経理課共済第二掛（内線22174～22176）にお問い合わせください。

布施学術基金公開講演会「東洋の文化」第10回

布施学術基金は、故布施郁三博士のご寄付にもとづき、人文社会系研究科・文学部の研究・教育に資しているもので、毎年１回公開講演会を開いて、教官・学生のみならず、一般の方々にも聴講して頂いております。本年は上記題目で、今後の学のあり方をめぐって、お話し頂くことになりました。広く関心をお持ちの方々に聴講して頂きたく存じます。

日時：2002年５月22日（水）16時～17時30分
場所：東京大学文学部一番大教室
講師：東京大学名誉教授　吉田民人氏
論題：科学的コズモロジーの転回
　　――大文字の第２次科学革命――
主催：大学院人文社会系研究科・文学部
問い合わせ先：文学部布施学術基金運営委員長
　　末木文美士
　　電話　03-5841-3754
　　（大学院人文社会系研究科・文学部）

教養学部進学情報センター主催シンポジウムの開催

「私が学問に目覚めた時」

日　時：４月26日（金）16時30分～20時
会　場：教養学部12号館２階1225教室

シンポジウムの趣旨と講師の先生方は次の通りです。講演後、先生方との質疑応答の時間も予定しています。ぜひ参加してください。

東京大学は、Late　Specializationを教育の大きな柱としている。そのため入学して２年間はすべての学生が教養学部に属し、最初の１年半は専門を超えた教養を身につけ、その後の進学振分けを通してあらためて専門分野を選ぶことになっている。大学の入学時に、学部・学科を選択しなければならない場合と比べ、それだけ自由度が大きく、より自分の適性にあった専門を選択できる可能性がある。反面、進学振分けという制度の下で必ずしも自分の意に添わない選択をしなければならないかもしれない。

今回の、進学情報センター主催のシンポジウムでは、各学部から講師の先生方に来ていただいて、それぞれの先生方が、どのような契機で特定の学問分野を選択することになったか、どのような経過で現在所属しておられる学部・学科で教育・研究に携わることになったかをお話しいただき、これからの進学先あるいは、専門分野の決定の参考にしてもらうべく、「私が学問に目覚めた時」というテーマを設定した。

若いうちは、目前の選択が一生のすべてを決定してしまうように考えがちであるが、現実には、いろいろな可能性、いろいろな選択の積み重ねの末に、ある形ができていくものである。今回のシンポジウムでは、これらの講師の先生方のお話の中に、人生の多彩な選択の可能性を見いだしてもらい、より広い視野から後期課程への進学を考える契機にしてもらえることを望む。

法学部　蒲島　郁夫　教授（現代政治分析学）
　「私が学問に目覚めた時」
医学部　廣川　信隆　教授（分子細胞生物学）
　「Scienceとの出会いそして21世紀日本のScienceについて」
文学部　高山　博　助教授（西洋中世史）
　「研究者と国際水準－西洋史学の場合－」
理学部　牧島　一夫　教授（電磁流体物理学）
　「宇宙を見たい！」
経済学部　神野　直彦　教授（財政学）
　「学問への目覚めと執着」
農学部　北原　武　教授（応用生命化学）
　「人生は偶然と出会い：我が学問（有機合成化学）の恩師達」
教養学部　野矢　茂樹　助教授（哲学）
　「人生の分かれ道」
薬学部　関水　和久　教授（細胞生化学）
　「私自身の経験から」
教育学部　恒吉　僚子　助教授（比較教育社会学）
　「教育現場への視点」
工学部　十倉　好紀　教授（物理工学）
　「私が学問に目覚めた時－お勉強の辛さと研究の楽しさ－」

問い合わせ先　教養学部進学情報センター
里見大作　教授（内線　46187）
（大学院総合文化研究科・教養学部）

「教養学部報」第455（4月3日）号の発行

―教官による、学生のための学内新聞―

佐々木毅：「攻撃的な勉強」の勧め
古田元夫：アジアを向く東京大学
金子邦彦：生命システムを創る・理論物理にする・どきどきする
鍾　非：レトリックで考える経済学
事 務 部：教養学部の教官組織・事務部
大森拓哉：学生相談所
里見大作：進学情報センター
宮内由美子：留学生との交流を
～日本人学生の皆さんへ～
遠藤泰生：アメリカ太平洋地域研究センター紹介――異文明間の対話を深める
川合　慧：情報教育棟
竹内信夫：駒場で学ぶ全ての人への訴え――駒場に大学図書館を再生させるために
義江彰夫：美術博物館案内
内野　儀：キャンパスプラザ
石川　隆：保健センター駒場支所

〈本の棚〉
渡會公治：小林寛道著『ランニングパフォーマンスを高める――スポーツ動作の創造』
認知行動科学スポーツ動作学のすすめ

〈私のいち押し〉特集・駒場探索
長木誠司：音楽ホール・芝居小屋
自分史の副産物
三浦　篤：駒場の美術館散策
斎藤兆史：駒場のレストラン・喫茶店
丹野義彦：駒場をフィールドワークしてみよう
～駒場の哲学の道～
大勝孝司：暢気な水泳選手

辞典案内（号外）
坪井栄治郎：英語
幸田　薫：ドイツ語
松村　剛：フランス語
安岡治子：ロシア語
西中村浩：ポーランド語
宮下志朗：イタリア語
上田博人・斎藤文子：スペイン語
黒沢直俊：ポルトガル語
大貫　隆：古典語（ギリシア語・ラテン語）
吉川雅之：現代中国語
野村剛史：国語辞典
黒住　真：漢和辞典
生越直樹：韓国朝鮮語
杉田英明：アラビア語
藤井　毅：ヒンディー語
サイフル　バハリ　アフマッド：マレー語
三沢伸生：現代トルコ語
中井和夫：ウクライナ語
柴　宜弘：セルビア・クロアチア語
古田元夫：ベトナム語
栗谷川福子：ヘブライ語
竹内信夫：サンスクリット語
近藤信彰：ペルシア語
ウィチャイ・ピアンヌコチョン：タイ語

「教養学部報」は、教養学部の正門傍、掲示板前、図書館入口、学生課ロビー、生協書籍部、保健センター駒場支所で無料配布しています。バックナンバーもあります。
（大学院総合文化研究科・教養学部）

≪ 事務連絡 ≫

人　事　異　動（教官）

発令年月日	氏　　名	異動内容（新官職）	旧（現）官職等
		（辞　職）	
14．2．28	冨　川　伸　二	辞　　職	医科学研究所附属病院助教授
		（昇　任）	
14．3．1	廣　瀬　謙　造	大学院医学系研究科助教授	大学院医学系研究科講師
		（派　遣）	
14．2．28	須　藤　　研	国立地震研究所（アルマティ）	生産技術研究所教授
		（死　亡）	
14．3．30	中　野　　実	死　　亡	大学院教育学研究科助教授

≪ 広報委員会 ≫

広報委員会委員長就任の挨拶

広報委員長　森　　裕司

このたび広報委員長を拝命いたしました森です。どうぞよろしくお願いします。昨年度は、前任の石川委員長のもとで対外広報誌の編集を担当しながら、“やれやれ広報委員長とはなんて忙しい仕事だろう、お気の毒に”、とひそかに石川先生に同情していたのですが、まさかその大役が自分に巡ってこようとは予想だにしておりませんでした。歴代の委員長が築きあげてこられた伝統を学ぶことが、さしずめ私にとっての初仕事になりそうです。

広報委員会は、巨大組織である東京大学のすべての構成員に必要な情報を迅速に提供する役割とともに、大学と社会との接点としての重要な責務を負っています。とくに後者の機能を重視される佐々木総長のご意向を受けて、広報活動はさらに強化される予定で、例えば淡青は年２回から３回に発行が増えます。また東京大学の広報ビデオも今年中に制作されることになり、そのコンテンツは動画としてインターネット上でも公開される予定です。各部局での特記すべき研究成果やトピックを報道機関に効率よく発信するシステムも稼働し始めています。これらはいずれも石川前委員長時代にインフラが整備されたもので、すでに滑走を開始した新たな取り組み満載の機体を、はたしてうまく離陸させられるか自信はありませんが、広報担当の廣渡副学長をはじめ広報室のスタッフや広報委員会委員の皆さんのご指導・ご協力を仰いで、なんとか新米パイロットとしての重責を果たしていきたいと思います。

広報活動に初めて携わった昨年度は多くのことを学ばせて頂きましたが、私にとって特に印象的だったのは、本学は実に多くの魅力ある人材に満ちていることの再発見でした。広報の目的の一つは組織のアピールですが、素晴らしい個性を等身大で紹介することにより、東京大学という組織の魅力やポテンシャルを、その息吹や鼓動まで含めて広く伝えていくことができるだろうと考えています。本学は7000名を越す教職員と３万人近い学生から構成されていますから、題材には事欠かないでしょうが、読者諸兄の積極的な広報活動への参加を、本年度の広報委員会を代表してお願いする次第です。

広報委員会委員長退任の挨拶

前広報委員長　石川　正俊

３月をもって広報委員長を退任致しました。廣渡総長特別補佐（現副学長）ならびに広報委員会委員の皆様とともに、東京大学として可能な範囲で公開性、透明性を高めることを念頭において、社会への情報発信、広報活動の整備等に努めて参りました。

具体的には、学内広報の電子化及びホームページ上のHTML化、対外広報誌「淡青」の年３回発行の準備（平成14年度より実施）及びHTML化の準備、ホームページ上の検索機能の実現、報道各社への情報発信強化（発信情報集約資料：東京大学activitiesの配布、記者との懇談会開催）、産学連携を念頭に置いた新しい情報発信ルートの開拓（産業新聞、雑誌等）、学内情報のホームページ上での公開、オープンキャンパス・公開講演会等を通した積極的情報発信等を実施して参りました。また、個々の発信情報についても、情報公開法を念頭に置き、可能な限りの公開性を確かめる方向で進めて参りました。

情報化社会の進展、情報公開法の施行等を背景に、東京大学からの情報発信が意味を持つためには、広報活動の積極性、すなわち問われて答えるだけではなく、東京大学から社会に情報を投げかけることで、東京大学の存在感を求心的・効果的にアピールすることが重要になってきています。このことは、必要な情報を的確に発信することが、社会からの信頼を得るための必要条件であることを意味し、そのためには、公開性や透明性はもちろんのこと、即時性、公共性、国際性も問われ、大学としての見識を求められことになります。これらに応えるため、東京大学の広報は、社会の変化に適応的に行われるべきであると同時に、東京大学の意思を反映した確固たる基盤のもとに行われるべきであり、ともすれば相反するこの２つのリクエストに対して適切なバランスを取る必要があるように思います。

この１年間、総務部総務課広報室の皆様、広報委員会の先生方、基盤情報センターのホームページ担当の職員皆様方には、大変お世話になりました。重要性を増す広報活動に対して、森広報委員長の下で、ますますのご活躍ご発展を期待致しております。

≪訃報≫

野口　彌吉 名誉教授

本学名誉教授の野口彌吉先生は平成14年２月23日に、ご病気のため逝去されました。

野口先生は東京のお生まれで、東京府立一中、第二高等学校を経て、大正13年に東京帝国大学農学部農学科をご卒業になりました。その後、同大学の助手に採用され、講師、助教授を経て昭和12年に教授に昇任されて、農学第三講座（制度改変により平成６年に廃止）を担任されました。同講座は作物栽培の原理に関わる講義を担当するために、大正12年に創設されましたが、初代担任の安藤広太郎先生が兼任であったため、同講座が実験研究を行なう研究室の体制を採るに到ったのは、二代目担任の野口先生のご尽力によるものであります。現在も存続している栽培学研究室がこれに当たります。

以後、昭和35年に定年でご退官になるまでの長期にわたり、先生は同講座を担任され、栽培原論、育種学、農学概論などの講義を担当するとともに、多くの有為な人材を世に送り出してこられました。「栽培原論」、「非メンデル式作物育種法」、「農学概論」、「水田農業立地論」など、多くのご著作がこの過程で生み出されました。定年の折りに監修された大著「農学大事典」は、その後、改訂を重ねて現在に到るまで、農学に関わる学生・研究者必携の書となっております。

研究面においては、先生はつねに学術のフロンティアを切り開くことに心血を注がれました。学位論文で取り上げられた植物の花芽形成の問題を初めとして、光合成、植物ホルモン、倍数性育種など、手掛けられたご研究はいずれも、わが国におけるそれら研究分野での嚆矢となるものでありました。これらのご業績は日本農学賞をはじめ、幾多のご受賞に輝いております。

先生は本学学内では教養学部創設委員、評議員、農学部附属農場長などを歴任されて学内行政に参画されるとともに、学外では東北大学ならびに名古屋大学の創設委員としても尽力されました。また第３期および第５期の日本学術会議会員として活躍されたほか、日本育種学会および日本雑草学会の創設に参画され、両学会の会長として重責を果たされております。このほか日本作物学会、日本遺伝学会、大日本農会など、数多くの学術技術関連の諸団体の要職を兼ねられ、多面的に活躍してこれらました。ご退官後は財団法人日本農業研究所の研究員として、さらなる研究に専念されました。先生のこれらのご功績に対しては、昭和46年に勲三等旭日中綬賞が贈られております。

先生はきわめて几帳面かつ誠実なお人柄で、学生や門下生の指導にはまことに厳しいものがありました。こわい先生でしたがそれだけに、門下からは多くの俊秀が輩出しました。

先生は1899年すなわち19世紀のお生まれであります。３世紀を生き抜かれた先生の希有のご生涯をお讃えするとともに、ここに謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

（大学院農学生命科学研究科・農学部）

二年目の雑感

本学に着任して二年が過ぎようとしている。本学の出身でない私にとっては新鮮な経験の連続であった。重厚な建物群には帝国大学以来の手厚い国家的支援の歴史を感じたし（中に入ると各所にくたびれが目立つこともよく分ったが)、御殿下記念館では至れり尽くせりのスポーツ施設に感嘆した。そうした物的な面だけでなく、専門的な教育・研究に専念できる自由があるというのもありがたいことである。

私は日本でいくつかの大学に勤務し、またドイツの教育思想史を専攻している関係でドイツのいくつかの大学を見聞する機会を持った。秘書と助手を２人づつ抱えるようなドイツの大学教授の条件と引き比べて、日本の大学（職場としての）をこんなふうに「定義」してみてはどうかと戯れに考えてみたことがある。つまり、「研究の意欲と能力のある人間を選抜して研究できない条件下に置く奇妙な制度」。

さすがに東大にはこの「定義」はあてはまらないようだ。しかし危惧がないわけではない。大学管理に関わる業務が、制度改革の進行とともにますます重荷になってきているように思えるからだ。教育学研究科には日本の教育学を先導するようなすぐれた業績を上げているスタッフが多い。そうした先輩スタッフを見ると、怠惰な私などからすればほとんど超人的と言えるような努力で大学管理的な業務と研究・教育を両立させて業績を挙げているのである。

大学自治の立て前から言って教員のスタッフが大学管理を担うのは当然としても、それを個々人の超人的な努力に委ねるには限界があろう。大学としての機能を支える全体的な条件を整える必要があるように思う。たとえば、助手、事務職員、図書館スタッフのような部分の定員削減は、ボディ・ブローのように深刻に大学の足腰に効いてくる可能性がある。今後大学改革に注がれるであろうエネルギーを考えればなおさら、教育・研究の自由を実のあるものにするための条件整備を真剣に考える必要があるように思う。

（大学院教育学研究科・教育学部　今井康雄）

（淡青評論は、学内の職員の方々にお願いして、個人の立場で自由に意見を述べていただく欄です。）

〔次号の原稿締切〕
4月17日（水）午後５時

総務部総務課広報室のE-mailアドレスが変わりましたので、原稿をE-mailでお送りいただく場合は、お気をつけください。

旧 kouhou@adm.u-tokyo.ac.jp → 新 kouhou@ml.adm.u-tokyo.ac.jp

この「学内広報」の記事を転載・引用する場合には、事前に広報委員会の了承を得、掲載した刊行物若干部を広報委員会までお送りください。なお、記事についての問い合わせ及び意見の申し入れは、総務課広報室を通じて行ってください。

No. 1236　2002年4月10日
東京大学広報委員会
〒113-8654 東京都文京区本郷7丁目3番1号
東京大学総務課広報室　☎（3811）3393
e-mail kouhou@ml.adm.u-tokyo.ac.jp
ホームページ http://www.u-tokyo.ac.jp/index-j.html